廣瀬川

第93号
平成30年
1月31日

仙台市小学校長会　　発行者／坂本　憲昭（会長）　責任者／今野　孝一（広報部長）

主張

校長の言葉

副会長　小野　順（東六番丁小学校）

私が新任教員として４年間過ごした学校で二人の校長と出会いました。そしてこの二人の言葉がその後の教員としての生き方を決定づけたと言っても過言ではありません。校長の言葉を今でも鮮明に覚えています。

特に心に残っている言葉が二つあります。一つはＩ校長が話された「教育という仕事は確認して歩くことです。」というものです。

朝方，雨が降った日でした。昼過ぎ子供たちが下校する頃には天気が回復し，玄関には持ち帰るのを忘れた傘が数多く残されていました。私は子供たちに「傘を忘れないで。」と声を掛けたものの確認はしていなかったのです。そのときＩ校長が私に掛けた言葉でした。

もう一つはＪ校長の言葉です。Ｊ校長は若い頃中学校の美術の教師でした。ある日のこと，私は学級の子供たちと桜の写生に出かけました。その様子を見に来た校長が私に掛けた言葉です。「先生，風景画を描くときには風を描かないと風景画にはならないよ。」何とも禅問答のような問いでした。

私は二人の校長の言葉を次のように捉えています。教師が指示を出したり，指導したりしたことは子供たちの心に響き，それに応えようとします。具体的な行動として示されたことを教師は自分自身の目で確認しなければなりません。もしそのことを怠ったとすれば，それは教育という範ちゅうではなくなってしまうということです。もう一つは，教師が「目に見えないもの，見えにくいものを見ようと努力していますか。」という問いを常に心にとどめておくことの大切さだと思っています。頂いた言葉をこのように理解をし，教員としての道を歩んできました。

自分が校長となり日々過ごす中で，二人の校長のように教職員に生き様を示しているのか甚だ疑問であります。

さて，本稿が皆様のお手元に届く頃には，各校において次期学習指導要領の移行期間・先行実施に向けての作業が本格化していると思います。

「特別の教科　道徳」「小学校英語科の新設」など大規模な改訂に対応しなければなりません。このような時こそ校長がリーダーシップを存分に発揮し，教育課程の編成や授業時数の確保に向け知恵を出し合い，よりよい学校運営を目指さなければなりません。

「見えないもの，見えてないものを見ようとする努力」「歩んだ足跡を一歩一歩確認して前に進む力」が，学校組織を柔軟でより強固なものにすることは言うまでもありません。

内　容

○主　　張 …… 1
○特　　集 …… 2
○座 談 会 …… 3
○提　　言 …… 16
○学区紹介 …… 18
○研究部から …… 19
○生徒指導部から …… 21
○新任校長所感 …… 22
○編集後記 …… 24

特 集

情報活用に着目した主体的・対話的で深い学びを生み出す授業を目指して

八島　均（錦ケ丘小学校）

１　はじめに

本校は平成27年４月に仙台市内127番目の小学校として開校し，今年度児童数1,059名，34学級の大規模校として３年目を迎えました。

地域住民の多くは，錦ケ丘地区の開発とともに移り住んできており，新たな街づくりに大変協力的です。また，学校・保護者・地域住民相互の連携が強固な地域でもあります。

本校では，開校以来「たくましくしなやかに生きる子ども」を教育目標に掲げ，基本的な学習習慣の確立や学習規律の徹底，さらに「分かる喜び，できる喜び，学ぶ楽しさ」あふれる授業を目指し，日々教育活動に取り組んでいます。

２　ICTを活用した学習指導の推進

今年度，研究主題を「『磨き合い高め合う児童の育成』～情報活用に着目した主体的・対話的で深い学びを生み出す授業づくり～」と設定し研究を進めてきました。

新しい時代を生きるこれからの子供たちに必要な資質・能力の育成に向け，「何のために学ぶのか」という学習の意義を押さえながら，「何を教えるか」という知識の質や量とともに，「どのように学ばせるか」という学びの質や深まりを重視した授業改善が必要であると考え，子供一人一人が目的意識を明確に持ちながら学習していくことを目標として授業を構築してまいりました。

そこで他者と自らの考えを出し合い，課題解決に向けて理由や根拠を明らかにしながら自分の考えを練り上げていくための手立てとして，情報活用に着目した単元構成の工夫を行いながら授業実践を積み重ねてきたところです。併せて仙台市教育委員会より認定をいただき，平成28年度・29年度の２年間「ICT機器であるタブレット端末を活用した授業及び学習環境」の在り方を研究してまいりました。

私たちは，〔情報活用に着目した主体的・対話的で深い学びを生み出す授業づくり〕を目標に，学習課題解決に向けて，様々な情報を活用しながら自らの考えを友達の考えと比較検討し，まとめ上げていくための授業改善を試みてきたところです。

具体的な取組として，情報活用に着目した単元構成と授業デザインの工夫を図るために，研究推進の視点を二つ設定しました。一つ目の視点としては，「課題意識や目的意識を持続させるための工夫」を挙げ，手立てとして，情報活用に着目した単元構成の工夫（情報活用型プロジェクト学習）及び課題設定と評価の工夫（ルーブリック）を講じています。授業（単元）を構築する際に，必要な情報をどのように授業に取り入れるか，あるいはどのような形で子供たちの学習に役立てるかを吟味するとともに，課題に対しての学びの質の尺度（ルーブリック）を設定し，一人一人の深い学びを生み出すよう努めています。さらに二つ目の視点として，「多様な情報を生かして深い学びを生み出す工夫」を挙げ，子供たちが情報を主体的に吟味・検討を行うことができるような学習活動の設定や情報を可視化，共有できるICT機器としてタブレット端末の積極的な活用を図っています。

３　成果と課題

主体的・対話的で深い学びを生み出す授業を構築していく手立ての一つとして，ICT機器であるタブレットを活用し研究を進めてきました。子供たちはタブレット端末を活用することで，情報を視覚的に共有することができるとともに，比較や関連付けなどを容易に行うことができるようになり，他者の考えを生かしながら自分の考えを深めることができるようになってきています。また，情報を持ち寄りながら協働的に課題を解決する場面を設定することで，学習の達成度や次に必要な手立てが明確になり，相互評価を行うことも可能となってきました。

学習のゴールの姿をルーブリックとして提示することは学習における成果や課題を見付ける指標ともなり，主体的な学習へとつながりましたが，学習の達成度と課題の自覚を促すためのルーブリック設定の適切化を考えていくことが今後の課題です。

座　談　会

復興と心の教育

●と　き　平成29年10月17日(火)　　●ところ　仙台市教育センター

【挨拶】　坂本会長　　この３月末に東六郷小学校が六郷小学校と統合となり，長い歴史に幕を閉じました。これで，津波により被災した３校が全て統合あるいは閉校となって，仙台市の小学校が120校となりました。そして，七郷小学校の児童数増加に伴い，仮称ではありますが第二七郷小学校の開校が平成32年度に予定され，震災から６年半と，だいぶ月日がたちまして仙台の復興は目に見えて進んでいるという感じがします。反面，　今年入学してきた１年生の中には震災後に生まれた子供たちもいます。また，若い先生方の中にも，当時学校現場にいなかった，震災を現場で経験していない方も増えてきています。このような中で我々は震災を風化させないための新しい取組を含めた防災教育を行っていく必要があるのではないかと考えています。

震災当時，不安定な中で生活していた子供たち，あるいは表面的には感じられませんが，保護者の不安から影響を受けた子供たちの心のケア，保護者のケアも必要になるのではないかと思います。

本日はこの座談会で初めて養護教諭が出席することになりました。熊本での経験を聞かせていただく貴重な機会となると思っております。加藤先生どうぞよろしくお願いいたします。最後になりますが，大変御多用のところ，学校教育部より佐藤参事にお越しいただいています。佐藤参事は津波で大きな被害を受けたときの雄勝中学校の校長先生でした。本日はその時の御経験なども聞かせていただけるかもしれません。佐藤参事，よろしくお願いいたします。それではこれから有意義な話し合いが行われますよう，よろしくお願いいたします。

今野広報部長　　坂本会長よりお話があったように東日本大震災から今月で６年半が過ぎ，仙台市内の学校でも，震災の被害から復旧し，復興に向けて神戸をはじめ全国各地から，あるいは世界各地から御支援をいただきながら取り組んできました。昨年度末までに津波被災校である中野小，荒浜小，東六郷小が統合や閉校になりまして，蒲町小学校などのように校舎に地震の被害があった学校も改築され，ハード的には復興が進みつつあるのではないかと思います。

一方，震災等に起因する心の健康問題を抱える児童に対するケアについては，精神科医やスクールカウンセラーなど専門家による訪問指導や全小中学生による七夕飾りづくりなど「児童生徒による復興プロジェクト」に７年間取組を続けてまいりました。

阪神淡路大震災を経験された神戸の先生方から，「心のケアには10年が必要です。神戸では６，７年後に生徒指導をはじめ様々な課題が出てきました。」というお話をいただきました。

震災復興まで10年は必要だと言われますが，半分以上を過ぎた節目の年に，本市での震災後の児童に対する心のケアの取組を振り返るとともに，今後の取組についての考えや意見を出していただき，また，本日は加藤養護教諭にもおいでいただいていますが，今後も想定される災害時に学校で行うべき心のケアの一助にするため，今回座談会のテーマを「復興と心の教育」とした次第でございます。先生方のこれまでの経験やお感じになったことなどをいろいろとお出しいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

本市の「心のケア」の施策について

司会（白井）　　まず始めに，仙台市教育委員会学校教育部佐藤淳一参事にお話をいただきたいと思います。震災から６年半が過ぎました。「第２期仙台市教育振興基本計画」に示された施策をはじめ，「杜

＜出 席 者＞

佐藤淳一（仙台市教育委員会 学校教育部参事）	**坂本憲昭**（仙台市小学校長会長 仙台市立荒町小学校長）	**鈴木一彦**（仙台市立南材木町小学校長）	**菅原弘一**（仙台市立六郷小学校長）
石川裕美（仙台市立芦口小学校長）	**加藤里沙**（仙台市立折立小学校養護教諭）	**今野孝一**（仙台市小学校長会広報部長 仙台市立上杉山通小学校長）	司会 **白井剛次**（仙台市小学校長会広報部 仙台市立四郎丸小学校長）

の都の学校教育」重点事項を含め，これまでに取り組んできたこと，本市児童の現状や課題についてお話を頂戴したいと思います。

佐藤参事　今年の１月に策定されました本市の第２期教育振興基本計画学校教育ミッション１に「豊かな心の育成」が掲げられております。本市の現況から，どうしてもいじめ防止や自死予防，不登校対策などにウエイトが置かれてしまいがちですが，震災による心のケアが不可欠であることはいうまでもないことです。市教委としては心のケア支援員の派遣等，継続的にサポートを続けているところであり，6年たとうが７年たとうが震災によって心に重いものを抱えている子供たちを市教委が，学校教育が支えていくということが私たちの使命であることに変わりはないのです。

仙台市が行っている生活・学習状況調査の中で震災後に子供たちの変容として顕著に表れたのが，大きく二つあります。一つは自己肯定感，二つ目が将来への期待感です。これについては両者とも震災後どの学年も低下するという傾向が見られました。

自己肯定感は年度が進行するごとに特に小学校が低下していき，全国でも最低水準で推移したという経緯があります。各学校でも課題改善に向けていろいろと取り組んできたこともあり，昨年度から徐々に上昇傾向に転じました。そして今年度は小学校５年生以上で震災前を上回るというところまできております。

しかし，将来への期待感については未だ低下したまま，低い水準でとどまっています。この不透明な社会，急激に変化する社会に対して不安を持っているのは，大人にとっても同様な部分があるかと思います。それをどのように解釈するかは難しい側面はあるのですが，ただあの震災によって，累々と人々が築き上げてきたものが一瞬にして瓦解し，瓦れきと化した，もしくはあれだけ多くの方が亡くなったというものを間近に見ていたり，そこの場に置かれていたりした子供たちが何かしらの喪失感や虚無感を抱いているということも，その結果に出ていると推測できると思うのです。だとすれば，同じ体験をした私たち大人が，教師が，子供たちのそうした心を少しでも軽くしてあげたい，していかなければならないと思います。

心のケアの基盤は日常の学校教育の中での教師と子供たちとの関わりの中にあると思います。そこを大事にしながら，いかに子供たちに寄り添えるかが問われていくと思います。私たち大人自身が生き生きと前に向かって生きている姿を見せてあげたいものだと思っています。

今日は震災に多くの関わりを持った校長先生方，養護教諭の先生とお話しできる機会に私も同席させていただくことに感謝いたします。市教委というよりは，今日，参加の先生方と同じ立場で参加させていただければと思っております。

各校における主に震災等に起因する心の健康問題を抱える児童の現状とその対応等

司会（白井）　佐藤参事から，本市の「心のケア」への施策，そして本市児童の現状等について仙台市生活・学習状況調査の結果などを交えながらお話ししていただきました。ここではまず，各校における震災等に起因する心の健康問題を抱えた児童の現状，そして，実際に御対応いただいたことについて，お話しをお伺いしたいと思います。

鈴木校長　この平成29年３月31日をもちまして東六郷小学校は閉校し，４月１日に六郷小学校に統合されました。60年の歴史を閉じたわけでありますけれど，閉校・統合に向けまして市教委，関係機関，校長会，各学校，PTAそして世界中の各地から多大なるご支援をいただきましたこと，改めて感謝申し

上げます。

私は平成25年度に着任しました。そのときは六郷中学校に併設されておりました。大震災前は，小学校の敷地内に町内会が設立した幼児学園があり，校長が園長，教頭が副園長，事務と養護教諭は，小学校と兼務して運営にあたっていました。

入園式・卒園式があり，運動会や学芸会は園児が小学校の行事に一緒に参加して，日常的に幼小連携ができていました。幼児学園を卒園して東六郷小に入学するという構図で児童数の確保もできていたのですが，大震災後，東六郷の地域にいても学校の再建は難しいと判断して六郷小学校の近くの幼稚園に入園，六郷小学校に入学するという家庭も出てきました。

25年度の児童数は26人でした。家が流されて六郷地区や親戚の家での避難生活を送っていました。大震災当時の状況を語らない子が多くいました。それは，保護者の「これからの生活がどうなるのか」という不安な気持ちを代弁していたのかもしれません。

大震災前と違って仮設住宅等での生活は，大きな声が出せない，家に帰っても友達がいないという環境でした。特に地元に戻って生活できる地区と危険地区とに分けられたことの大人のストレスが子供にも影響してしまい，本来の子供の姿を出し切れていないと感じていました。そんな中でも学校にいる間は楽しそうに過ごしている姿に，私も救われた思いがしました。時間経過とともに，中学校の中にあるここが自分たちの学校なんだと現実を受け止めて生活できるようになったのは，教職員が教科指導だけでなく，家庭の状況を考慮した細やかな配慮があったからだと強く感じました。

25年度のスタートで，たった１人の入学式が行えたことは大きな意味がありました。始業式・入学式で学校が始まり，卒業式・修了式で終わるという，当たり前のことができる幸せを感じることができました。

そういう中で25年度から，閉校・統合の時期について，保護者と地域代表が市教委と話し合いを進めていきました。保護者・各町内会長・同窓会長で組織され，学校の現状を伝えるために校長も同席しました。学校再建に向けて保護者の方々や地域の方々は継続するということで基本的な考えは一致していました。しかし，当時の状況や生活環境を考えると閉校・統合はやむを得ないという思いが伝わってきましたが，表立って口にすることはありませんでした。

PTA本部から全家庭に学校再建への思いや閉校の時期についてアンケートを実施しました。当時の３年生の保護者５家庭は，保護者の思いとして卒業まで学校を続けてほしいという強い願いを市教委に伝えました。保護者からは子供の思いも聞いてほしいとのことで，担任が聞き取りました。子供にも親の思いが伝わり，親と同じ意見だということを市教委に伝えました。しかし３年生以下の保護者の思いは複雑で，本音では子供たちを卒業させたいという強い思いを持っていましたが，口に出すことはありませんでした。校長として，心情を察すると，非常に心が痛みました。町内会長さん方は保護者の意見を尊重するという立場をとっていました。

様々なことを考慮して市教委からは，３年生が６年生になって卒業する平成28年度が開校60年目という節目の年であり，また，保護者や地域の意向をくんで29年３月末をもって閉校，そして４月１日に六郷小学校との統合の方針が伝えられ，懇談会で保護者等からも了承されました。

翌26年度は新入生がいなかったので，入学式のない，全校児童20人でのスタートで，とても寂しい思いをしました。現実を受け止めながら，閉校・統合に向けて，何をいつまでするのか，校内で準備委員会を組織しました。同時に，市教委主導で，『統合準備委員会』も組織され，荒浜小学校の事例を基本に動き出しました。

学校の特色である少人数の良さを生かして，全校体育，全校遠足，低学年と特別支援学級の生活科単元に上学年が参加，運動会に保護者や地域も参加する種目を入れるなど，一人一人が主役であることを意識した教育活動を行いました。

菅原校長　六郷小学校では，前年度から東六郷小学校の鈴木校長先生と連携を密にして，いろいろな行事も日常の活動でも交流を深めて，統合がスムーズにいくようにという気持ちでやってまいりました。ただ実際には統合で東六郷小学校から六郷小学校に転籍した児童は２名だけでした。鈴木校長先生のお話にもありましたが，それ以前に仮設住宅に入った段階で東六郷小から六郷小へ転校していた家庭もありました。忘れられがちですが，東六郷小学校の北側エリアには六郷小学区の三本塚地区という東六郷小学区と同じ状況になった地区があります。

そのような地域の中には直接的にだいぶ重い経験をした子もいて，いろいろな調査や防災訓練があったときに反応が出るという子供たちがいたのです。昨年度でそのような直接的な経験をしたという子の多くが卒業し，現状だと何らかの震災にまつわる経験があるという子は,717名の児童のうち10名に満たないぐらいになってきています。だから日常的に子供たちから震災の影響を感じるということが，感覚的にはだいぶ薄くなってきています。ただ何らかの調査のときに書かれる内容を見ていくと不安に思うことと震災の経験とが結び付いたりするので，注意深く見ていく必要があるということを感じながら学校経営に当たっています。

転籍は２名の子供たちだけでしたが，東六郷小が六郷小に統合されるというのは，子供たち以上に地域の方にとって重みのあることだったと思います。具体的な対応は，始業式，入学式の前に児童会主催で「お迎えの会」を計画して，二人のお子さんをお迎えしました。それは地域の方へのお披露目という意味合いもあって盛大に行いました。振り返ってみると，地域の方々に改めて統合をお伝えする場になったのではないかと思います。

そして養護教諭が１名，教諭が１名，東六郷小学校から六郷小学校に異動になりました。２名の転籍の子ではあったのですが，東六郷小学校でお世話になっていた先生がそのまま六郷小学校へ来てくださったということで，すごく安心して過ごせているのではないかと思います。特に保健室は子供たちが担任に話すのとは違って安心して話せる場でもあるので，２名の子供たちだけでなく,元からいた六郷小学校の子供たちにとっても，保健室の先生が２名いて，心に不安を抱えた子供の話をじっくりと寄り添って聞いてあげられる体制となっていることには，大きな意味があると感じているところです。

全体的に見ると今も震災の影響が色濃く出ているようなことは感じないのですが，逆に何がどう影響しているのか分からないのが心配です。震災の影響かどうかも分からないのですが，全般的に保護者の不安傾向が強くなってきているような感じがします。今の低学年の子などは直接的な経験よりはおそらく親から何かが伝わったということの方が多いと思うのですが，親の不安傾向が強ければ，子供も落ち着かないというようなことがあって，それが震災と関係があるのかどうかが分からず，どのように対応していくとよいかを悩んでいるところです。そういう不安傾向が強い親と子がいる中で，学校はその不安を取り除いてあげなければと思うのですが，もしかすると，そこまで考えなくてもよいようなことまでしていないか，そういう所を手探りでやっているのです。

最後に，地域感情のようなものは表立って聞こえてはこないのですが，気持ちの中には多分積み重なっているものがあると思います。そういう所にもどのように配慮して学校経営を進めていくか悩みながら対応しているというのが現状です。

石川校長　私からはまず自身が着任した震災後の平成25年４月から閉校までの３年間の荒浜小学校における子供たちの様子と学校の対応についてお話しいたします。

荒浜小学校には，津波で家族を失った子供や車に乗っていて津波に追い掛けられて九死に一生を得た子供など，つらく悲しい思いをした子供がたくさんいました。私が荒浜小学校に着任した頃には子供たちはだいぶ落ち着きを取り戻していましたが，まだまだ子供たちの心のケアを最優先にしなくてはならない状況は変わってはいませんでした。

震災から３年が過ぎようとしている頃から子供たちの様子に変化が見え始めました。震災当時のことや荒浜地域のことを話題にする子供が増えてきたのです。子供なりに周りの状況を察して，なかなか口にできない状況があったのではないかと思います。ちょうど２年後に閉校が決まった時期でもありました。私たち教職員は２年先の統合をゴールにして，２年間で育てたい子供の姿について話し合いました。平成26年度のスタートに当たり確認したことは次の二つです。一つめは，一人一人の心に残る大切なふるさと，自分の目で確かめた復興の様子をしっかり心にとどめ，今の自分たちに何ができるのかを考えさせたいということです。もう一つは，たくさんの方々の温かい気持ちに支えられてきたことに感謝の気持ちを持ったり，同じようにつらい体験をしている方の気持ちに寄り添ったりできるような心を育みたいということでした。10年後，20年後の復興の担い手となる子供たちに，何事にも負けない心の礎となるふるさとと，そこに共に暮らした方々とのつながりを実感させるとともに，感謝や思いやりの心を持って歩んでいってほしいと考えました。

子供たちは4年が過ぎた頃から，荒浜に何度も足を運び，自分なりに未来の荒浜を心に描くことができるようになりました。支えてくださった方々の温かい気持ちに，いつか子供自身の力で恩返しができる日がくることを信じて荒浜小学校は閉校の日を迎えました。

次に，統合先の七郷小学校の対応についてお話しいたします。平成28年3月31日に荒浜小学校は閉校し,4月1日から教諭2名と教頭の私との3名で七郷小学校に着任しました。そのときの子供たちは6名でした。そのたった6名の子供たちを七郷小学校ではとても温かく迎えてくれました。1,000人を超えるマンモス校への移籍で，かなり萎縮するのではないかと思いましたが，2年越しの交流で顔見知りがいたことや，荒浜小学校から異動した職員が6名の学年にそれぞれ担当したこともあり，子供たちは，元気に統合先での生活をスタートさせました。

ちょっとしたことを震災の体験と結び付けてしまって不安になる子や，11日の度に震災に係るテレビ等の報道に過敏になる子供もいましたが，担任や養護教諭,スクールカウンセラー等と情報を共有し，適切に対応することができたのではないかと思っています。

また，当時の髙橋智男校長先生が挨拶のたびに荒浜小との統合に触れてくださったことが，子供だけでなく保護者や荒浜地域の方々にとっても大きな安心感になったのではないかと思います。子供たちの発表の中にも「七郷小は，荒浜小と統合してパワーアップしました」「二つの学校の良さを七郷小の伝統にしていきたいと思います」等の言葉が盛り込まれるようになり，校長先生のメッセージが子供たちに確実に伝わっていることを感じました。

さらに，七郷小学校が文部科学省の研究開発学校の指定を受け，防災教育に取り組んでいたことも様々な意味で子供たちの成長につながっていたと思います。震災を忘れることなく，当時の体験を生かしながら，防災を通して自助，共助の力を養うとともに，復興学習に取り組むことを通して，未来に向けて希望を持ちながらたくましく生きようとする児童の育成を目指していくことが研究のねらいです。こうした内容は，統合前の荒浜小学校での取組に通じるところも多々ありまして，子供たちは自信を持って学習に取り組むことができました。

先日,6年生になった被災前の荒浜校舎を知らない4人の子供たちが陸上記録会に来ていました。七郷小のユニフォームを着て，大勢の友達と誇らしげに肩を並べ,「先生，頑張っているよ。」というメッセージを送ってくれている姿を見て本当にうれしく思いました。ふるさと荒浜を心の礎としながら，新しい仲間と新しい生活にチャレンジしていく子供たちをこれからも見守っていきたいと思っています。

加藤養護教諭　熊本市立桜木東小学校には，震災加配として勤務しました。前震，本震ともに子供たちが自宅にいる時間に発生したため，学校に対する恐怖感はほとんどありませんでした。しかし,「家が壊れたらどうしようか」と不安に思う子供もいました。他にも「なかなか一人でトイレに行けない」「怖い夢を見る」と訴える子供や，休校明け，登校を渋る子供もいるなど地震が子供たちの体や心に与えた影響は決して少なくありませんでした。それでも「不安にならないように友達と遊ぶ」,「つらいことを誰にも言わず『大丈夫』と心の中で言う」など自分の心と体に向き合う子供たちのたくましく，健気な様子が先生方と情報を共有する中で見えてきました。

保健室では，日常の執務と並行して課題を抱えた児童への支援やカウンセラーとの連絡調整，余震が続き先の見えない不安を抱えた保護者への対応を行いました。スクールカウンセラーによる心のケアによって「怖いのは自分ひとりではない」,「みんなも怖かったんだ……」と実感できたようです。そして,「怖い」という気持ちは命を守る大切な気持ちなんだと分かったことが,子供たちの安心感につながり，その後，カウンセリングが必要な子供の数は少しずつ減っていきました。

地震から半年が過ぎた頃から，何となくクラスが落ち着かないと感じることが増えていきました。回復傾向にある子，不安感が持続している子など子供たちの状態にも格差が生じ，混在しているためと思われました。養護教諭同士の情報共有の場でも突発的，衝動的な行動をとる子が出てきたという話もあり，子供たちの日常の観察，行動の見守りの必要性を改めて強く感じる時期でもありました。

地震から1年を迎える4月には新しいクラス，新しい担任，中学校への進学など子供を取り巻く環境は大きく変化します。子供たちが安心してその日を迎えられるようにと2月から3月にかけて，カウン

セラーと一緒に当時を共に乗り越えた学級，仲間での震災の振り返り，加熱するであろう震災の報道等で不安になったときのリラクゼイションなどをカウンセラーと一緒に実施しました。

私は，派遣勤務を終えて熊本を離れるにあたり，子供たちがこれからどうなっていくのかという心配もあったので，熊本の子供たちにもこれから少しずつ前に向かっていってほしいという思いを込めて，スライドを使いながら震災後の仙台の子供たちの様子を伝えることにしました。私が今勤務している折立小学校は，6年前の東日本大震災で一時校舎が使用できなくなり，中学校の体育館や武道場を借りて生活していましたが，折立小の子供たちは多くの人に支えられ，前に向かって進んできたこと，助けられる側から今は助ける側になっていること，今でも自分の命を自分で守るための勉強を続けていることを伝えました。

佐藤参事　今の話を受けるようになるか分かりませんが，当時18,446人の方が亡くなられたり，行方不明になられたりしました。家族が一人亡くなるのはとても大きなことなのですが，余りにも亡くなった方が多くて，当時，自分だけではないという思いの中で，怒りとか悲しみとかいうものを表出できないで過ごした人が，子供も大人も大勢いました。また，私のいた中学校では，母親が亡くなったことをどうしても受け入れられない子供がいたのです。御遺体が見つからないということもあったのですが，お葬式を挙げるのもずっと拒み続け，帰ってくるのを信じ続けていたのです。そういった子が一人だけでなくもっと他にもいて，本当に悲しみをぐっと胸に押し込んで涙一つ流さないのです。どれだけつらい思いを抱えながら，長い時間を過ごしたことか。私は，校長室で一人になったときや通勤の途中などでもその子たちを思うと，涙が止まらなくなるということが何度もありました。その度に，この子供たちのためならば全てを注ぐと決意を新たにして取り組んできました。18,446という亡くなった方の数もそうですが，その方々につながる家族であったり，恋人であったり，多くの方々が，今も自分の心を開けずに抱え込んでいて，現地を訪れると笑顔で対応してくださり，元気な姿を見せてくれるのですが，実はやっぱりずっとそれを背負って生きているのだと思います。命は助かったとしても，家を失ってふるさとを失って人生を一気に変えなければならなかった方が何十万といるわけです。そういった事実とかその方々が背負ったものとか，その心の有り様というのは過去のものではなく今も現在進行であるのです。それが，難しくなっているのは，今までは見えていたのが，どんどん潜在化して見えにくくなっていることです。でもそういう思いが，ずっとずっとその方々の中には残っている，そこに我々はどう向き合っていくのかが時が経つにつれて難しい状況になってきていると思います。

ですから，一つは個が心の奥に持っているものを我々はきちんと理解し，配慮して関わることと，もう一方で子供たち全体に我々が学んだことをどう返していくかです。あの当時，人とのつながりや助け合うことがこんなにも大切なのだとか，助け合うことやいろいろな方々への感謝の気持ち，朝が来ることの喜び，ご飯が食べられることへの感謝などをすごく実感し，再認識していたことをどんどん忘れていく。そこが風化していくのが怖いのです。やはりあの大震災を体験した私たちには，学校教育の中にそれを反映させて，次世代を生きる子供たちにその体験を伝えていく使命があり，それができるのだと思うのです。私たちだからこそできると思っています。

私は仙台の子供たちこそ本当に命を大切にし，いじめが最も少ない，安心して互いが支え合い助け合って生きていく子供たちであってほしいと願って止まないのです。それは震災というつらい体験をしたからこそ，あの体験をこれから生き抜くための貴重な体験に昇華させていくべきと強く思うのです。しかし現実はそうではないというところを私たちは時間を掛けて打開していかなければなりません。体制・対策づくりはもちろんですが，子供へのいたわりだとか，もしくは配慮だとかをもう少し改善しながら，これからのあり方というものをみんなで考えていかなければならないと思います。

それぞれの取組及び対応で得たこと

司会（白井）　ここからは，各学校の取組及び対応を通して得たことや現在勤務校で生かしていきたいこと等について，具体的にお話しいただきたいと思います。

菅原校長　今，佐藤参事から個への配慮と全体と

いう二つの視点をいただきました。全体についてお話させていただきます。

震災直後，前任の明石校長先生の時代から自己肯定感に着目されて，多様な外部の人材を学校にお招きし，子供たちにいろいろな経験をさせてきました。

そこで挨拶や夢をキーワードにしていろいろなことを積み重ねてきました。実際に学校の玄関にもスポーツ選手から寄贈されたすばらしい物がたくさん飾られています。本当に多くの方が来校し，子供たちと触れ合ってくださったのを感じることができます。ただ，これまでは，外部の支援者やボランティアの方々から受け取ることが中心だったような気がしています。自分たちがもう少し積極的に関わったり，何か自分たちができることに参画したりする方に少しずつ変えていくことができればと思い，去年あたりから取組を進めています。

一つの例として６年生が「富士山」をテーマに静岡の学校と交流学習をしてきました。子供たちは，こちらの学校には富士山なんかないと思っているのですが，実は六郷小からも太白山や蔵王山が見え，それが富士山のような地域のシンボル的な山だと分かるなど，地域を見直すことにつながっています。そうした学びを発信して地域の方や関係する方に評価してもらうことが，子供たちの力になると思っています。PTAフェスティバル等もすごく良い機会だと思っていて，今までは子供が直接関わることはありませんでした。せっかく総合の学習で子供たちが育てた餅米をおこわにして売るので，自分たちがどうやって米を育ててきたのかというパンフレットを作って，それを添えて売る。また売り子も子供たちが実際にやってみるということを試みました。お客さんに「いいね」と言ってもらえる，そういう体験によって自己肯定感が高まりました。さらにPTAで関わったお母さん方も「やって良かった」という実感を得ることができました。自分たちから積極的に働きかけたことを評価してもらい，力を付けていくということをどんどん進めていけたらと思っています。

また本校の場合東六郷小さんから太鼓を引き継いだというのがすごく大きな学校の柱となっています。全くその土台がなかったのですが，子供たちはすごくやる気があるし，地域の方々の思いもすごく大きくて，とにかくあれをなくしてはいけないということでやっています。いろいろ出演の機会をいただき，六郷地区，東六郷地区両方の地域の方からありがたがられ認められ，子供たちもその気になってやっています。認められることは大事だと感じています。早く演奏ができる曲目を増やしていきたいと思っています。

また，六郷には六郷音頭というものがあり，歌詞に地域の良さが織り込まれています。六郷市民センターさんと共同で，子供たちが学ぶことも始めています。

地域を題材にして地域の方といろいろなことをやる中で，我々教師とは違う視点で褒めてもらったり認めてもらったりできる活動を展開することが，大切だと思っています。実際に防災の視点からも，普段から地域と子供たちがつながっていなければ，いざというときに何もできないということを，私たちは重々感じています。地域づくり，人との関係づくりを大切にしてきたいと思います。心の教育と言って，何かを直接しているわけではありませんが，そういうことをやっていくことが心の基盤づくりには大切だと思います。先生方がその意識を持ってそれができるかどうかが分かれ道なのかなと思っています。

鈴木校長　まず，東六郷小でのことについてお話します。着任する前に思ったことは，教職員や保護者・地域の思いを受け止めて，それぞれの関係づくりに努めようと思いました。

新学期の準備を進めていた時，教職員から通常の学校生活を送りたい，普通に授業がしたいとの声が寄せられました。復興の第一は，通常の学校生活を送ることだと考えて，教育環境の整備をすることに重点を置いて学校経営にあたりました。津波被災校ということで，外部からの支援やお見舞い，被災地訪問，児童の励まし等の調整にあたりました。津波被災校でも，通常の学校生活を送ることで，教職員や保護者の心が安定してきました。それが，子供たちの心の安定にもつながったと思います。

先ほど石川校長先生から，荒浜小の子供たちは荒浜のことをお話していたようですが，東六郷小の子供たちは，そのことを口にすることはありませんでした。

私は，閉校，統合を意識しながら子供たちに何を残してやれるのか教職員と話し合いをしました。失われたふるさと失われつつあるふるさとをしっかり

と子供たちに理解させ，私たちの思いをしっかりと子供たちと共有していかなければと思いました。そこで26年度から「ふるさと教育」に取り組みました。被災した本校や地域の様子をフィールドワークとして見に行くことにしました。被災した地元に行くことを不安がっていた児童も数名いましたが，養護教諭やスクールカウンセラーも同席し，また保護者への事前アンケート調査を行い実施しました。そこで子供たちが見たものは，自然環境が少しずつ戻ってきたことです。田んぼの堀にどじょう・ザリガニなどを見付けました。塩害を受けた田畑にも元気に植物が生長していました。また近くの「冒険遊び場」の復旧作業の様子も見に行きました。子供たちは，復興に向けてどんどん動いていることや新しく環境整備がなされていることに気が付きました。将来に向けて希望が持てたことは非常に大きかったと思っています。

私は着任したときから，この子供たちは近い将来，出会う人から，「出身は？仙台は？津波は？家族は？」等いろいろ聞かれたときに，自分の言葉でしっかり語れる子供に育てたいと，常々教職員と話してきました。そうして，この「ふるさと教育」を通して，きっとそのような子供になるだろうと感じることができました。

保護者からは，子供たちのためにPTA活動を復活させたいという思いが伝わってきました。そこで，手探りの中から児童会行事の「PTAの出店」「夏祭り」「夏季休業中のプール開放」「広報紙作成」等，一つずつ実現可能かどうか検討しました。児童数の減少は，保護者の数も減っているということで，大人の手が足りない分をどのように補うことができるかが大きな課題でした。宮城教育大学の復興支援センターとつながることができて，学生のボランティアを募ることができました。また，若林区中央市民センターとの連携，さらに若林区役所の応援等，大震災後につながったところの物的支援と人的支援があり，PTA活動を再開することができました。子供たちも親の姿を見て，大きな支えとなり前向きに動き出すことができたと思います。

地域は六郷と一緒になることにそれほど不安や不満はありませんでした。しかし，地元に戻れた地区と戻りたくても戻れない地区の二つに分断されたことで，東六郷への思いをどのように伝えたり自分たちの思いを表したりすればいいのか，なかなかうまく統一性を図ることはできませんでした。閉校，統合が決まったのと同時に，校舎解体も決まったのですが，校庭の跡地が残ることになりました。その跡地をどうするかの話し合いを進めてきました。地元に戻った人と戻れなかった人，そして新しくつながった六郷との新しいコミュニティの場として活用していけるのではと検討を続け「わたしのふるさとプロジェクト」の活動を始めました。それが今日までつながっています。

そういう東六郷の活動を基盤として，南材木町小に着任したときには，学校と地域が非常に強くつながっていて，連合町内会の下の交通安全協会，防犯協会，社会福祉協議会等の組織，そしてその下にPTA，子ども会がしっかり組織化され，学校に対して協力的な活動が行われていました。

八軒中学校区の学校支援地域本部は，本校が事務局校として動いており，中学校，若林小学校，古城小学校の３小１中で組織されていますが，なかなかそれぞれの単位校が機能できないということがありました。今年度から来年度に向けて支部校になれるように地域全体が連携することによって，中学校区のつながりができていくのではないかと思っています。これは，前任校の東六郷と六郷で，地域を交えた活動を通して感じたことです。それを現在の勤務校でも実践していきたいと思っています。

石川校長　荒浜小学校の閉校を前に，校舎に掲げる看板のスローガンに地域の方々の学校への思いを盛り込みたいと，子供たちが聴き取りの活動していたことがありました。震災当時，荒浜で町内会長をされていた早坂さんが子供たちに語ってくれたそのときのお話をわたしは生涯忘れることができないと思います。「『母校』という言葉がありますが，小学校はわたしにとって母親のような存在です。いつもそこにあって，わたしたちを見守り，温かくすべてを包み込んでくれているように感じています。震災当日も多くの命を守ってくれた母校荒浜小学校には感謝の思いでいっぱいです。」早坂さんは，その地域に住む人々にとって，学校は象徴的な存在であると同時に心のよりどころでもあるということを母親の愛情に重ねて語ってくださったのです。一つの学校がその歴史を閉じることの重さと，卒業生や地域の方々の計り知れない寂しさや喪失感に胸が締めつけられるような思いになったことを今でも覚えています。

早坂さんはじめ，荒浜の地域の方々は被災し，

東宮城野小に併設された校舎に通うようになってからも子供たちにエールを送り続けてくださいました。ある方は仮設住宅から，ある方は身を寄せている親戚の家から，行事や授業のために駆け付けてくださいました。私が荒浜小学校に勤務する３年間，その光景が変わることはありませんでした。学校は，地域の方々に守られ，支えられ，育てていただいているのだと実感する日々でした。

私たちがこれから先，どのように学校運営をしていけばいいのか，時代を見据えて考えていかなくてはなりませんが，同時に，これまで積み重ねられてきた学校の歴史や伝統を理解し，地域の方々の思いや願いを生かしていくこともとても大切なことだと考えています。現任校においては，地域の方々から率直にお話しいただけるよう，まずは積極的にコミュニケーションを図るよう心掛けていきたいと思っています。

七郷小学校でも，多くの貴重な経験をさせていただきました。

震災の風化が懸念されていますが，一人一人の体験の違いで温度差が生じるのは仕方のないことだと思います。しかし，全校で防災教育に取り組む中で，６年間の見通しを持った指導計画と適切な資料や講師の活用，そして先生方の熱意で，震災の教訓を生かした防災の授業が成り立つことを実感してきました。これからは震災遺構である荒浜小校舎もその一翼を担ってくれるでしょう。まだしばらくは，子供たちの心のケアが必要だと言われる期間が続くのではないかと思います。そっと見守ることが必要なときもあるかもしれません。けれども，防災や復興について発達段階に応じて知識として習得したり，体験したことを基に考えたり，主体的に学習を進めていったりすることは，子供たちの心のケアにつながっていくと私は信じています。

杜の都の学校教育の重点事項の中に，今年度から防災対応力の育成が掲げられました。どのように実現させていくかは，校長のリーダーシップによるところが大きいと思います。震災の被害が少ない芦口小で，実感の伴った防災訓練をどのように行うかを教職員で話し合いました。今年は子供たち，保護者全員がそれぞれ必要な物を防災リュックに入れて持ち寄り，１時間の授業を行いました。子供たちは子供たちなりの発想ですが，保護者は震災当時のそれぞれの経験を踏まえながら，防災リュックの中身を用意していました。今年度の活動を踏まえて，震災の被害が少なかった本校でもできる防災訓練を考えていきたいと思います。

加藤養護教諭　熊本地震から半年が過ぎた10月に，気温30度を超える中で運動会が行われました。子供たちは，炎天下での練習をものともせず，本番では力を出し切って，きらきらと輝く笑顔を見せていました。学習に取り組む真剣な姿，冬でも半袖で校庭を駆け回る元気な姿などたくさんの前向きな様子に触れ，保健室で関わりを持っていくうちに私にできる支援は，「子供たちには自分を守る力，回復する力を持っている」と信じ，子供たちの日常を支えていくことなのだと気付かされました。

長期的な心のケアが求められた阪神・淡路大震災後の先例を受けて，仙台市では，東日本大震災後，早期に「児童生徒の心のケア」の取組が始まりました。その一つである「児童生徒の心のケア」に関する研修会の職種別の実施は，管理職，教諭，養護教諭それぞれが担う役割を明確にし，学校がチームとしての支援を可能にしました。また，継続的な研修の実施で，心のケアについての正しい知識を持ち，先を見通した支援に当たることができました。

いまだ経験したことのない状況において，子供の心のケアの基盤を学校という場，学校における教職員の日常的な支援に置き，日々の関わりや教育活動を通して子供たちの自己回復力を引き出す学校の持つ力のすごさを感じました。

大きな衝撃や急な環境の変化を体験した子供たちにとって，学校は日常の生活を取り戻せる大切な場所であること，学校が再開したことで子供たちの日常が戻り，心の支えや心の回復に大きな力を与えていたということを熊本の子供たちを目の前にして改めて感じました。

「未来を切り開きたくましく生きる子供を育てる学校経営」への思い

司会（白井）　最後に，それぞれの学校で取り組んで得たものや課題等を踏まえ，「未来を切り開きたくましく生きる子供を育てる学校経営」について，校長としての思いをお話しいただきたいと思います。

まず，仙台市教育委員会から，今後の施策を推進

していくにあたり，これからの課題，また，学校運営について校長に期待することを含めて佐藤参事からお願いいたします。

佐藤参事　被災から，8 日後，奇跡的にも本校雄勝中の生徒が全員無事であることを確認できました。その夜のことですが，一人寝泊まりしていた仮の職員室で，全員が生きていたという喜びと同時に，地域は壊滅し，校舎は完全に廃虚と化して，生徒はほぼ全員が家を失い，家族を失った生徒もいる，職員も一人亡くなり，家を流された職員もいる，そんな中で，あの惨状を生き延びた子供たちを，学校教育ごときが支えていけるのか，ましてや自分が校長として何ができるのか，と自分の非力と無力を痛切に感じ，一睡もできませんでした。

しかし，その後１年間，職員と心を一つにして子供たちを支えて，学校教育だからこそできたことがあり，そして学校教育の可能性を実感しました。本当にすさまじい状況の中ではありましたが，そのことを強く感じました。教育の原点に戻って，子供たちのために何ができるのかを，本気になって，必死になって考えること，動くこと，そうすればたいていの課題は乗り切れると私は今，思っています。それが，私が震災から学んだ大きな事の一つです。

今，本市の学校教育は，いじめ問題をはじめ，課題は多岐に渡り，校長先生方に求められることも多様化の一途をたどっています。

しかし，校長だからできることがあります。やはり，校長でしかできないことがあるのです。その点は，自信と覚悟をもって学校経営を推進していただきたいと思います。一方で，一人の校長が持っている力は知れているというところもあります。学校の課題改善や子供たちの豊かな学びの環境を創出するためには，多くの方の力を借りることをいとわない，ためらわないということだと思います。地域の方はもちろんですが，もっと視野を広げ，いろいろな方々を学校教育に巻き込んでいくコーディネートする力が，今校長に求められているのではないかと思っています。

今，私自身，本市の中でなんとなく閉塞感のようなものを感じることがあります。やはり，今こそ，あの大変な震災の状況下でも，私たちは子供たちのためを思って，教職員と地域の方が一緒になって前を向いて進んだように，今こそ「前を向く」ことが大事だと思っています。

あの時のことを生かしていくなら，今このような状況にあって，信頼も失われてきていると言われている本市の学校教育ですが，今こそ私たちは前を向いていく時だ，と考えます。理想や夢を校長はしっかりと語って，もちろん市教委も語って，それを教職員と共有して，実践をきちんと計画的に，そして力を合わせて意図的に展開していかなければならない時期なのだろうと思っています。

どうか，校長先生方には，御自分が目指す理想の教育を御自分の学校でされてほしい，そして実現してほしいと思っています。

加藤養護教諭　熊本に出発する際，東日本大震災を経験しているとは言え，自分に何ができるのか，という思いと，熊本の先生方や子供たちは，知らない土地から来た自分をどのような気持ちで迎えるのか不安を抱えての出発でした。震災によって異例づくしの中でも子供たちの日常を支えてこられた熊本の先生方には，早期対応と継続した対応が求められる心のケアにおいても，文字通り一生懸命に頑張っておられ，自分も一緒になり対応に当たることができました。子供の心の健康の回復を目指し，職員が力を合わせ，必要な時に適切な支援に当たることの大切さを痛感した熊本勤務でした。今，折立小に戻って，チーム折立の一人として先生方と子供たちの抱える個々の課題を共有して，力を合わせた支援ができるのも，熊本での経験があったからだと思います。

保健室は，子供たちの「頭が痛い」「おなかが痛い」等の訴えをもとに身体的アプローチができる場所です。原因は一つではないという視点を持ち，子供が保健室に入って来た時から養護教諭の専門性と，自分が先生方や子供たちから得た多くの情報のピースを組み合わせ，子供の状態や何を求めているのかというニーズ，隠れた思いを読み解くように努めています。ふとした気付きを大切にし，子供が安心して自分の気持ちを表現できる場をつくり，安定して関わることのできる身近な存在でありたいと思います。

さらに，子供たちの困難を乗り越え，前に進んでいく心身のたくましさを信じ，養護教諭としてそれを引き出すために人と人とをつなぎ，チーム学校として子供たち一人一人を支援できるよう努めていきたいと思っています。

石川校長　私は，この４月に新任校長として芦口

小学校に着任いたしました。震災時の先輩の校長先生方のように，的確な判断と行動により，子供たちの大切な命を何が何でも守らなくてはならないという重圧を日々感じながら学校経営に当たっております。

芦口小学校は，昭和54年に開校し，来年で40周年を迎えます。八木山，西多賀，緑ケ丘の三町内会の一部が学区に指定されているため，地域の方々は，それぞれの町内会に所属しつつ,「芦口学区町内会連絡協議会」という芦口小学校区の組織にも重複して所属しています。荒浜の方々がそうだったように，地域の方々は様々な思いを持って学校に関わってくださっており，開校当時から学校の行事に参加してくださる方もいらっしゃれば,「うちの子供たちがお世話になった恩返しです。」と言って，ボランティアを引き受けてくださる方もいらっしゃいます。

また，芦口小学校区防災訓練は，芦口学区町内会連絡協議会を中心に地域の方と学校が話し合いを重ねて実施するようになり,今年で６回目になります。地域の代表の方々は「学校は子供たちの命を守る最前線になる。避難所運営は地域で行わなくてはならない。」という一貫した方針を持っておられて，そのおかげで，地域と学校が協働して行う訓練と，それぞれのねらいで行う訓練をうまく組み合わせて実施することができています。地域と学校とが防災マニュアル作成について話し合いを持ち，一緒に作っていることも大きな特徴だと思います。

本校はこれまで，このように前向きで温かい地域の方々に支えられながら教育活動を進めてまいりました。けれども，子供たちがこれからの変化の激しい社会を生きていくためには，物事に主体的に向き合い，様々な他者と関わっていくことがますます大切になってくると考えます。

学習指導要領の改定で,「社会に開かれた教育課程」の実現が求められています。社会と連携・協働しながら子供たちが未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むためだとされています。こうした時代の要請からも，これからの教育課程は，学校にとって一番身近な社会である地域の方々に参加，協力していただくと同時に，地域の方々の思いや願いが反映されたものになるようにしていかなくてはならないと考えています。

芦口小学校の強力なサポーターである地域の方々にこれからも様々な面でお力をお借りしながら，これから特色ある学校づくりを更に推進することで，芦口小学校で学んだことに自信を持って歩んでいける子供を育てていきたいと思います。

菅原校長　子供たちがこれから先をたくましく生きる，ということを考えたときに，震災が及ぼした子供たちの心への大きな影響を考えないわけにはいきません。短期的に捉えると，子供たちは心に大きな傷や深い傷を負っているだろう，だから不安や困難を取り除いていってあげたいという気持ちになるのだろうと思います。実際，保護者も子供たちも不安傾向が強い状況を見ると，どうしても，まず目の前の安心・安全を確保するということを重点的に行わざるを得ない，というのが実情です。

しかし，それを長期的に見て，子供たちが真にたくましく育っていく，やがて社会に出て,「社会的な自立」の基礎を培うということを考えたときに，取り除くということ一辺倒で本当に大丈夫なのか。これは，私が最近，特に思うことです。程度はありますが，人にはネガティブな感情もあって当たり前です。そういうものをうまくコントロールしていきながら，生きていくことも必要だと思います。そういう意味で，困難を乗り越えることや，失敗を恐れずにチャレンジすること，創造性を発揮しながら前に進んでいくこと，それらを支える多様性の理解や豊かなコミュニケーションの力など,「たくましく生きる力」育成プログラムで示しているような知恵・態度を，じっくりと幼児教育の時期からかん養していくことやバランスよく身に付けさせていくことの重要性が増しているように思います。

そして，それは小学校だけではなく，幼児期の教育から同じように意識し，同じところを目指して，幼保・小・中と「たくましく生きる」という柱で縦のつながりをこれまで以上に意識しなければならないと考えています。また，地域，広い意味で社会全体と関わりながら子供たちを育てていく，横のつながりも強化していかなければならないと思っています。

そうした力は，教室内の学習だけでは，十分に力として備わらないため，体験や様々な人との交流活動の充実を図っていく必要があります。そのことを，教員一人一人がしっかりと理解し，日々の授業に反映させられるような学校経営を進めていきたいと思います。例を挙げれば,震災直後に故郷復興プロジェクトで各校が作った応援旗があります。六郷小学校にも飾ってありますが，あの旗が作られるにはどう

いう経緯があったのか，その真意が分かる教員はこれからどんどん減っていくことになります。そういう意味でも，今が節目だと強く思います。改めてこれまで本市の教育は何をやってきたのか，そしてこれから何が大事なのか，それを先生方と確かめていきたいと思っています。

鈴木校長　12日の２学期始業式で，子供たちに「見通しを持って生活しましょう」，という話をしました。これは，職員にも日頃から言っていることですが，現在，どのような状況にあるのかということを子供たちがしっかりと受け止め，次の一歩を踏み出せるような環境づくりが重要であると常々感じていたからです。そのためには学校と家庭，地域の密なる連携が必要です。子供には，学校と家庭の顔があります。学校では友達や先生がいるので，前向きな考えや行動ができます。けれども，忙しい保護者の中にいる子供は，話をしたいときには家庭に相手がいない環境にあります。子供が，「こんなことできたよ」「こんなことをやったよ」と自分の思いを話しにくい環境にあります。

発達段階やその時々の状況にもよりますが，自分で考えて判断し，行動に移せる児童の育成には，やはり学校と家庭，地域の連携が大事だと感じています。

自然災害から，自分の命を守るためには，発達段階に応じて，自然災害に対する知識と備えについて，防災教育としてしっかりと取り組む必要があります。東日本大震災後に，何をどのようにしていたのかを体験した私たちがしっかりと伝えることが重要です。それを基に，子供たちに何をどうすればいいのかを考えさせて，日常的に取り組むプログラム作りが大切であると思っています。今，そのプログラムづくりに取り組んでいます。今週末，地域と保護者と一緒に取り組む，総合防災訓練があります。いつも，大人が考えたプログラムに子供が参加する状況でしたので，先ほど石川校長先生のお話を聞いて，そうではなく，訓練のための訓練ではない，子供たちが自分で考えて行動できるような訓練を，この訓練が終わった後，改めて教職員と一緒に考えていかなければという思いを強くしました。

その点で，保護者と一緒に取り組む防災・減災教育を推進していくことが，未来に向けての一歩につながると思います。物としての備えと心得ておくことの備えをすることで，いざというときに行動に移せると思います。そのためには家族だけで活動するのではなく，友達や御近所，町内会，子供会などのつながりが大きい本校の特色を生かし，それぞれの団体の活動や行事に参加して，つながりを持つことが大事であると思います。

そして，不安を不安でなくするためには，「想定外を想定していく」ことが重要です。震災当時，水が出なくなる，ガスが来ない，携帯電話がつながらないということは，考えていませんでした。その後は，経験したからこそ，分かることがたくさんあるので，様々な場面設定をして，震災を経験していない子供たちが，自分で考え，行動できるようにしなければならないと考えます。どのようにして水を確保するのか，食料はどうするのか，家族との連絡の取り方など，起こった出来事を前向きにとらえて，どうすればよいのかを考えて行動できる児童の育成こそが，未来を切り開いていく，生き抜く力を育むと考えています。

司会（白井）　最後に，本日の座談会のまとめを含めまして，坂本校長先生にお話しいただきます。

坂本会長　本当に良いお話だと，聞き入っていました。座談会ではもったいなく，シンポジウムとして全ての校長先生方に聞いてもらった方が良かったと思いました。出席された方のそれぞれの思いとこれからどうしていかなければならないかという熱意が感じられて，これをまとめていくのは難しいと感じています。ただ，本日の座談会をお聞きしながら，私が新任校長の時，新任校長研修の一環として被災地を回った時のことを思い出しました。

本日おいでいただいている，佐藤参事から，被災した雄勝中学校を案内していただきながら，震災時の様子と学校再開，そして，本当の復興とはどういうことなのか，その意味を教えていただきました。また，当時は女川四小の校長でありました，現校長会広報部長の今野校長先生からも，津波の恐ろしさや当時の学校の様子など，我々が経験できなかったことについて教えていただきました。その後，被災した戸倉小学校の当時の教頭先生から，災害時の管理職の判断の重さについて深く考えさせられたことを覚えています。これらのことが，現在校長としてある自分にとても役立っています。

今年度校長会では，活動の重点の中に，「命と心を守り育む教育」を重点事項に掲げました。そして，「命を大切にする教育の一層の推進」「心の健康教育の充実と強化」「教職員がより子供たちに向き合える体制の構築」を三つの柱として，各学校における取組をお願いしています。さらには，命を大切にする心や他人を思いやる心など，子供たちの豊かな心を育み，いじめや不登校を無くし，全ての子供たちに，学校は楽しいところだ，安心できるところだと感じてもらえるように，危機意識を持って学校経営を進めておられることと思います。

震災当時，学校は避難所を開設して多くの避難者を受け入れました。その中で，私たち教員は学校再開に向け，本当に心を一つにし，子供たちをとにかく学校に集めようという思いでいたことを忘れてはいけない，と今日の話を聞いて改めて思いました。

６年半が経ちましたが，あの時に私たちが感じ，思ったことを鮮明に思い出しました。それは，命の大切さや助け合う心の大切さ，他にもたくさんある震災から学んだ大事なことを子供たちに伝えていかなければいけない，ということです。今日の話の中でも，校長の思い，それを継続的に子供たち，保護者，地域，教員に伝えていかなければいけないということ，そして，あのときに経験したことを我々で終わるのではなくて，これからも伝えること，それをどう生かしていくのかということを，再認識しました。加藤先生の言われた，「学校は子供が日常生活を取り戻す場」というお話から，子供たちに学校は必要なのだと強く思います。そこで，子供たちのために何ができるのかということを，我々校長は常々考えて，参事のお話にありましたように，教育の可能性を信じて，校長一人一人が，そして校長会としてみんなで一緒に考えていかなければいけない，と思いました。本日は，ありがとうございました。

【挨拶】近澤副部長　本日は御多用中にもかかわらず，仙台市教育委員会学校教育部参事佐藤淳一様に御臨席を賜り，誠にありがとうございました。

また，仙台市小学校長会会長，荒町小学校坂本憲昭校長先生，本会会員である南材木町小学校鈴木一彦校長先生，六郷小学校菅原弘一校長先生，芦口小学校石川裕美校長先生，そして，折立小学校養護教諭加藤里沙先生に御出席いただきまして誠にありがとうございました。

東日本大震災から６年半が過ぎ，ハード的には復興が進みつつあるといえる仙台市ですが，震災に起因する心の健康に関する諸問題について考えていかなければいけないこの時期に，御出席いただいた皆様から，児童・保護者・学校の現状や取組状況の御紹介，今後の展望等について貴重なお話を伺うことができました。それぞれのお立場で，子供たちのために御尽力されておりますことに敬意を表したいと存じます。

本日の座談会の内容は，この後，広報部でまとめさせていただき，仙台市小学校長会の会報誌「廣瀬川」に掲載する予定でございます。また，本会の会員のみならず，仙台市小学校長会のホームページから，仙台市の小学校の取組を全国に向けて発信することになっております。

本日は，お忙しい中，貴重なお時間を頂戴いたしまして誠にありがとうございました。

以上，簡単ではございますが，閉会の挨拶といたします。

提言
復興に向けた創意ある教育

これが私の故郷です

第1地区会長　赤間　宏（東二番丁小学校）

今や本校学区内に震災の傷跡を認めることは難しく，震災は本当にあったのかと錯覚すら覚える。その危険性を戒める数枚の写真が校長室に掲示されている。仙台駅や近隣商店街からおびただしい人々が学校に押し寄せた震災直後の様子に，来客は一様に驚きの声をあげる。

また来るかもしれないその日に“共助”や“公助”の一端を担うであろう子供たちに対して，どのように地域への愛着や誇りを持たせるか。山も川もなければ地面も校庭ぐらいにしかない自然環境，町内会も子供会育成会も本来的な機能を果たし得ない社会環境にある本校においては，ことさら重要な課題である。その取組を紹介する。

１　地域の祭りへの参加

ほとんどの子供たちは夏休みの二日間，一番町三社まつりと三瀧山不動尊夏まつりにそろいの法被姿で参加する。下学年は宮城野盆唄を歌いすずめ踊りを披露し，上学年は10台の和太鼓を並べて「ぶち合わせ太鼓」を演奏。アーケードに子供たちの元気な掛け声と太鼓の音が響き渡る。事前に，２回の土曜日を使って地元銀行和太鼓愛好会の皆さんから手ほどきを受けている。

２　仙台七夕への参加

全校児童や教職員，保護者が力を合わせて本格的な五つの吹き流しを作る。出来あがったものはアーケード内の一番良い場所に飾られる。昨年は「努力賞」をいただいた。

これら二つの取組は，地域の商店街の要請を受ける形で，卒業生の全面協力を得て震災前から行っている。学校も地域の一員であるとの考えに立ち，地域活性化に一役買っているものと自負している。

児童の25％が学区外から通い，転勤族も多い。子供たちは将来，どこの地に居ても七夕やすずめ踊りのニュースに接したとき「これが私の故郷です」と思い出してくれることだろう。こうした取組の継続が子供たちの原風景・原体験となって人を思い，居住する地域を思い，自然災害等の困難にも立ち向かう力，復興推進の力になっていくものと確信する。

提言
復興に向けた創意ある教育

地域で学び，子供たちをたくましく育てる

第3地区会長　小熊　信治（荒巻小学校）

復興に向けた教育で，子供たちに身に付けさせたいのは，未来を切り開きたくましく生きる力である。

本校では，協働型学校評価の目標の一つを「地域で学ぶ教育活動を推進し，地域の方に感謝の気持ちであいさつできる子供の育成」に定め，自分づくり教育の一環として，起業家教育に取り組み，地域と関わる学習の中で，子供たちをたくましく豊かに育てる試みを続けている。

高学年は，３年前から，総合的な学習の時間に「荒巻元気アップ作戦」を行っている。５年生は，地元の商店を取材し，その商店の特徴を表現した応援ポスターを作った。プロのコピーライターさんやデザイナーさんから「その商店の何をどのように伝えるか」の指導を受けて行っている。

６年生は，「ウィラブ荒巻～告白！大好きな所～」のイベントを12月に行った。荒巻の商店を訪ねていただこうとシールラリーを行った。焼き芋無料券等が当たるくじを子供たちが商店と交渉して用意したことが人気を呼んだのか，当日はたくさんの地域の方々に参加していただいた。「初めて地元のお店に入りました。」と話される方々もいて，商品が売り切れる店まで出る盛況ぶりだった。

これらの学習を行う上で欠かせないのが，地域の方々のお力だ。御協力いただいている商店の皆様や安全面での見守りをしていただいている学習ボランティアの存在なくしては成り立たない。本校では，まず当該学年の保護者に呼び掛け，さらに不足数を学校支援地域本部で確保するという方策を取っているが，回を重ねるごとに，参加してくださる方々が増えており，学校理解にもつながっている。

地域コミュニティーにおける関係の希薄化が叫ばれる昨今であるが，そんな時代だからこそ，地域の方々のお力をお借りし，地域で学ぶ教育活動を積極的に行い，地元愛を育んだり，チャレンジ精神や実践力を伸ばしたりする学習を通して，子供たちをたくましく豊かに育てていきたいと思う。

提言
復興に向けた創意ある教育

松の葉のようにつながって

第5地区会長　梅原　隆司（東仙台小学校）

震災によって再認識されたのが防災への備えとともに住民同士の日頃からのつながりであろう。本校の学区では震災による被害は少なかったが，震災直後は多くの避難者が身を寄せるという状況があった。震災後は分譲住宅やマンションの新設があったため，被災地からの転居者や震災遺児・孤児の転入があるなど，心のケアを心掛けるべき子供がいた。また，以前より児童養護施設から通学している子供もおり，それぞれに現況からの立ち直りや自己有用感を高めることが課題となっていた。共に心の傷や荒廃を癒やして活力を高めてやる必要があった。

人と人との関わりの中で子供たちは生かされ成長していくが，縦割り活動などはよい方法と考える。他校においてもそれぞれ工夫をしながら実施されていることと思うが，本校でも以前からこの活動に取り組んでおり，更に力を注いでいる。本校では縦割り活動を校木の「黒松」にちなんで「まつばタイム」と称している。全校児童447名が学級を基本に14グループに分かれ，年間で11回活動している。いずれも高学年児童が設定されたねらいに従って計画して行っている。業前の短時間活動が６回，45分間の活動が５回である。下級生の子の面倒を見たり上級生から優しくされたりといった人との交わりを通して，自分の良さや周りの思いに気付いてくれたらと強く願う。

活動の中に「みんなで大縄跳びをしよう」というものがあった。全グループ対抗で時間内に跳べた回数を競うものであった。高学年が役割を分担して下級生に声掛けし，下級生は回数を数えながら奮闘した。跳び越える様子に一喜一憂しながらも失敗してしまった子への悪口は聞かれなかった。

今，子供たちはこの縦割り活動をさらに充実させて，いじめ解消への取り組みにつなげようとしている。排除ではなく強い結び付きへ向かおうとしているのである。「人」という字に似ている松の葉が２本でひとつであるように，人と人とのつながりを大切に思えるような子供に育てていきたい。

提言
復興に向けた創意ある教育

子供たちに故郷をつくる

第7地区会長　大江　広夫（大野田小学校）

「あの日」からと言って，現在どれだけの人たちが未曾有の大災害による計り知れない被害とその影響の大きさを想像することができているのか。

当時，これまで取り組んできた教育活動を改めて見つめ直し，大切にしていることや継続していることにしっかり目を向け地道に活動していくことが重要であるという認識が静かに広がっていたように思う。

特に，子供たちは「今，自分たちにできることは何かを必死に問い，できることを精一杯やろう。」と，児童会を中心とした挨拶運動や清掃活動，花いっぱい運動などに取り組んできた。これらの活動は，多くの保護者や地域の方々の心を動かし，生きる勇気や希望を与えてきた。「普通であること，当たり前であることにも多くの人々の努力を要し，感謝しなければならない。」と学んだ子供たちは，「わたしたちが精一杯生きること。あの震災を忘れないこと。」と誓い，今日まで様々な取組を続けている。

今年度，当校の復興プロジェクトでは，６年生の子供が七夕飾りとなる折り鶴への思いを全児童に向けて語り掛けた。「今年も鶴を折りました。低学年の頃には何も考えずに作っていたのですが，震災によって傷ついた人たちを少しでも励ますことができればという思いがだんだんと強くなってきました。２年前に商店街につるされた大きな千羽鶴を間近で見たとき，その鶴を折ったことを誇りに思いました。」

また，「ようこそ先輩」という行事に「花は咲く」の作詞者岩井俊二さんに来ていただき，歌が生まれた背景や詩に託した思いを語ってもらった。「故郷になかなか帰れない人たちが遠くから見つめている様子を日記のように書いた。」ということ。『いつか生まれる君のために』のところが気に入っています。未来を思うとき，一番自分が優しくなれるから。」と聞いた子供たちは，自分を大事に生きることや身近な人への感謝の気持ちを抱いたのではないかと思っている。

悲しみや苦しみを癒やしてくれる地域の人々の温かさと自然の豊かさに包まれながら子供たちがたくましく育っていくことは，やがて故郷を愛おしく思う気持ちや生きる支えになっていくと信じている。

学区紹介　地域とともに

ゆるキャラとともに

板橋　髙広（長命ケ丘小学校）

「校長先生，あいタワーくん，あいカネちゃんは，入学式の後，どのように登場させましょうか？」

昨年度着任してすぐにおやじの会の方から言われた言葉です。子供たちを支える応援団との出会いでした。

長命ケ丘小学校は，長命ケ丘団地誕生とともに，昭和54年４月に開校しました。最大1,400人越えから南中山小学校との分離を経て，最近は350～400人の中で推移してきている学校です。

あいタワーくん，あいカネちゃんとは，平成25年，自分づくり教育の研究指定の中で，当時３年生だった子供たちが長命ケ丘を盛り上げようと，公園にある愛の鐘にちなんで考えたキャラクターです。それをおやじの会が中心となって着ぐるみのゆるキャラまで作ってしまったのです。

子供の思いを形にしてしまうパワー，そして，ゆるキャラを核に子供たちや地域を盛り上げようとする心意気を強く感じた昨年の１年でした。その反面，たくさんの応援に甘えてしまっている学校，子供たち，そして，保護者があることも痛感させられました。「学校に泊まろう」や「餅つき大会」など，やってもらって当たり前という雰囲気だったのです。

地域に根ざす学校としてできることは何か，教職員や子供たちには「感謝と返礼」の大切さを伝え続けました。そんな中，「長命ケ丘が笑顔でいっぱいになるような活動をしていきたい」という６年児童による新学期の抱負をきっかけとして，「長命に笑顔をとどけ隊」が結成されました。「市民センター祭り」「児童センター祭り」や「スポーツフェスタ」などで地域を元気に，そして笑顔にするスタッフの一員として生き生きと活動しています。

「愛の鐘が仙台一，宮城一になってほしい」キャラクターを作った当時の３年生の言葉です。その子たちも中学１年となりました。「笑顔をとどけ隊」も中学校へ引き継がれるはずです。ゆるキャラとともに小中連携を強化して，おやじの会などたくさんの応援団の皆様と手を携え，仙台一，宮城一の長命ケ丘を目指したいと思っています。

学区紹介　地域とともに

よい地域はよい学校をつくり，よい学校はよい人をつくる

山田　洋一（八乙女小学校）

八乙女小学校は，仙台市北部に位置し昭和56年に開校しました。八乙女は，国道４号線から延びる北環状線に沿って大型スーパーや大型商店が軒を連ね，その両側にマンション群が，高台に住宅地が形成され利便性の高い地域です。そのため，転勤族が多く児童の転出入が激しい学区ですが，学校と家庭，地域が連携し子供たちを真ん中においた様々な活動が脈々と展開されています。

その根幹を成すのが，父母教師会，子ども会育成会，体育振興会，民生委員，父ちゃんの会，町内会等の方々です。学校のためなら子供たちのためなら，苦労を意に介さない方々ばかりです。 また，上記の諸団体が一丸となって平成18年に「地域で子どもを守る会」を立ち上げ，地域の安全や子供たちの交通事故防止を願って登下校時の旗振りや見守り活動を行ってくださいます。さらに，父ちゃんの会は，仙台市内で一番に創設され伝統があります。夏は花山キャンプ，冬は餅つきや凧揚げ等楽しい催し物がたくさんあります。様々な学校行事への協力や支援活動も充実しています。

八乙女小学校には，かゆいところにそっと手を差し伸べてくれるような学校の応援団がたくさんあります。「よい地域はよい学校をつくり，よい学校はよい人をつくる」という言葉がぴったりな八乙女です。

八乙女中学校区は平成23年より「学びの連携モデル事業」を推進しています。９年間を通した生き方教育を柱に，地域連携や学力向上等の取組を効果的に関連付け，今日をたくましく生きる力の習得を目指す学校教育を推進しています。また，幼保小の連携，小１生活・学習サポーター，スタートカリキュラムの充実に加え，中１ギャップの予防・解決にもつなげています。さらに，地域全員での防災に関する座談会や情報交換をきっかけに，地域防災推進の機運が高まり，中学校区地域防災訓練の開催に至ったことはモデル事業成果の一つです。

八乙女小学校の子供たちが，中学生や高校生，やがて大人になり，学校と家庭，地域の活動を支えていく一員に成長することを期待します。

研究部から

研究部の活動を振り返って

研究部長　鶴谷　研（長町小学校）

１　はじめに

今年度も７月に行われた第57回東北連合小学校長会研究協議会山形大会（以下東北連小山形大会）をはじめ，10月に第69回全国連合小学校長会研究協議会佐賀大会（以下全連小佐賀大会），11月には第71回指定都市小学校長会研究協議会川崎大会（以下指定都市川崎大会）と，三つの大きな研究協議会が開催された。仙台市小学校長会からもこれらの大会に多くの会員が参加し，多様化・複雑化する学校課題の解決に向けて校長が果たすべき役割と指導性について研究協議を深め，日々の教育実践に反映されている。今年度は，仙台市からは指定都市問題研究委員会が研究発表に向けて対応した。領域別研究委員会は来たるべき平成31年全国秋田大会に向けて研究に取り組み，学校課題委員会は昨年度から取り組んできた「チーム学校」「多忙化解消」の課題について実践校を取材し，研究協議会で紹介しながら会員相互の協議を深めた。また，県市の権限委譲が進められる中で宮城県と仙台市の研究部は県市研修部連絡協議会を通じて連携を図り，平成30年度以降の研究に向けて調整を図ってきた。

２　東北連小山形大会（平成29年７月６日～７日）

昨年度の岩手大会の成果を引き継ぎ，山形県山形市で開催された。東北各地から1,037名の校長が集い，宮城県からは182名，その内仙台市からは57名の会員が参加した。

【大会主題】

「新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進」

－夢と希望をもち　共に未来を拓く　いのち輝く子どもを育てる学校経営－

大会１日目は会員を迎えるプレゼンテーションに始まり，開会式，そして記念講演が行われた。田中利幸大会会長から学校統廃合による会員数の減少を視野にコンパクトな大会を目指し，研修の充実を何よりのおもてなしという挨拶をいただき開幕した。

記念講演では，慶應義塾大学先端生命科学研究所所長の冨田勝氏に「日本の未来は東北から　～慶應鶴岡キャンパスの新・人材育成～」をテーマに講演をいただいた。人工クモ糸などで知られる数々の技術開発と共に東北だからできる人材づくりについて熱く語られ，校長にとって学校経営に資する多くの示唆をいただいた。

２日目は10分科会が行われた。宮城県からは以下の二つの分科会で話題提供を行い，仙台市からの発表は今年度はなかった。

〇第９分科会　健康・環境　視点１

「生きる力を育む健康教育推進と校長の在り方」

・発表者　登米市立宝江小学校　遠藤麻由美校長

〇第10分科会　連携・接続　視点１

「家庭・地域等と連携し，地域に貢献する学校づくりの推進と校長の在り方」

・発表者　大和町立吉田小学校　遠藤実校長

各分科会では視点１，２に基づいた発表を受けて，研究協議の柱を設けながら小グループによるワークショップ型の協議が行われた。分科会では東北各県のそれぞれの地域に根ざした教育実践について活発に意見が交わされた。この後，分科会ごとに閉会行事が行われ次年度青森大会へと引き継がれた。

３　全連小佐賀大会（平成29年10月12日～13日）

全国各地から2,400余名の会員が吉野ヶ里遺跡で知られる佐賀県佐賀市に集まり全国大会が開催され，宮城県からは38名，その内仙台から12名の会員が参加した。

【大会主題】

「新たな知を拓き　人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進」

～志を胸に　高きに和して　未来を創る　子どもを育てる　学校経営の推進～

１日目の開会式では，全連小の種村明頼会長の挨拶から始まり，下川雅彦佐賀大会実行委員長からは「志　高きに和す　創造」の大会コンセプトが示さ

れた。続いて文部科学省講話では次期学習指導要領の改定に向けて，その内容や移行期間も含め今後の流れについて簡潔に御説明をいただいた。

その後，13分科会が７会場に分かれて研究協議が行われた。参加した第７分科会「研究・研修」でさえも170名以上の参加があり，28の小グループを編成し，二つの視点，大会開催地区ブロックから一つ，全国から一つの２県の研究発表を受けて，研究協議が行われた。

２日目は研究協議会のまとめの報告の後に，シンポジウムが行われた。NHKみんなのうたのイメージ画などを手掛けた画家の中島潔氏，柿右衛門窯の15代当主である酒井田柿右衛門氏，そしてオリンピックの実況中継も担当したNHKシニアアナウンサー内山俊哉氏の３人によるシンポジウムで「未来を創る子どもたちに　～あたたかく　強く　しなやかに」をテーマに，自らの道を究めた人生を三つの視点に区切りながら話され，今の子供たちへの思いも含め紹介された。これを全連小調査研究部の針谷玲子部長が「未来を創造する子供たちへ，教育に携わる校長へのメッセージ」についてまとめ閉会となった。

４　指定都市川崎大会（平成29年11月９日～10日）

全国21の政令指定都市から300名余りの会員が，政令指定都市の中では人口増加率が最も高い川崎市に集い研究協議会が開催された。仙台市からは指定都市問題研究委員７名を含む11名が参加した。

【大会主題】

「夢や希望をいだき　個の自立と　共に生きる力を育む学校経営」

１日目はミューザ川崎シンフォニーホールで近藤岳氏のパイプオルガン演奏で開幕し，開会式では丸山衛川崎市大会会長の挨拶と続いた。今年度から県費負担教職員が政令市移管，次期学習指導要領の告示など，変動する社会情勢にあって学校を取り巻く環境が大きく変わりつつある中で，大都市が直面する諸課題の解決に向け，校長が果たすべき役割と指導性について研究協議を深めた。

開会式の終了後，各都市の参加者が３分科会に分かれ話題別情報交換会が行われた。テーマは各都市へのアンケートを受けて「校長会の運営組織」「教職員の資質向上システム」「英語・外国語活動」となった。

７都市２分間という短くまとめた口頭発表の後，小グループで情報交換を行った。「校長会の運営組織」では，話題は県と政令市の校長会の分離が当然中心となった。１年後には計画的に分離する校長会もあれば，分離せずに一緒に運営していく校長会もあった。仙台市のように既に分離して県校長会と連携を図っているところは少ないことを改めて感じた。午後からは六つの研究協議会が開催され，仙台市からは第３分散会において沖野東小学校熊谷敏校長が指定都市問題研究委員会の研究成果を発表した。

○第３分散会「人権教育上の諸問題」

「いじめの未然防止に向けた施策の推進と学校経営」

発表者　仙台市立沖野東小学校　熊谷　敏校長

仙台市教育委員会がいじめ問題を最重要課題として推進している施策を受け，市内各小学校で「未然防止・啓発活動」「早期発見・早期対応」「教職員が子供に向き合える体制づくり」「家庭や地域との連携」の４点についての取組を紹介した。特に，沖野東小学校での特色ある実践事例を紹介し，校長の果たすべき役割や今後の課題を示すことができた。

夕方には指定都市全員参加の交流会が開催され，情報交換と懇親を深める機会となった。

２日目は教育講演「東京2020を契機としたスポーツによる街づくり」をテーマに東京オリンピック・パラリンピック組織委員会企画部の天野春果部長による講演が行われた。川崎フロンターレ時代の街づくりに貢献した手腕を生かした多くの取組は学校経営を担う校長として示唆に富むお話であった。

５　その他

研究部では三つの委員会の活動を年度末に研究紀要にまとめて報告する予定である。また，宮城県研修部とは平成30年度以降の東北連小の分科会割当てなど今後の予定を協議して決めている。仙台市としては平成32年度には東北大会宮城大会を主管していく。今年度は準備委員会を立ち上げ，来年度からは本格的に実行委員会を立ち上げ準備していくことになる。大会の年は次期学習指導要領の完全実施の年となるだけに，今後の動向をよく把握しながら研究を進めなければならない。

今年度もたくさんの会員の皆様から研究部へ御指導御支援いただいたことに改めて感謝申し上げます。

生徒指導部から

「豊かな心の育成～命と心を守り育む教育～」の推進

生徒指導部長　渡邉　大助（木町通小学校）

１　はじめに

杜の都の学校教育や小学校長会においては，今年度の重点事項の一つを「豊かな心の育成～命と心を守り育む教育～」としています。

生徒指導部の活動の方針は，「児童の健全育成等今日的課題についての指導と対策の充実を図り，各校における生徒指導実践の一助とする。」です。仙台市や校長会の重点事項を踏まえ，調査研究，中学校生徒指導部会や関係諸機関との連携等の活動を推進してきました。以下，主な活動を紹介いたします。

２　生徒指導部の活動

⑴　調査研究

平成28年度から，いじめの未然防止に関しての調査研究活動に取り組んでいます。「いじめの未然防止に取り組む学校経営と校長の役割」というテーマで，小学校長へのアンケート調査を実施し，まとめました。

昨年度は，仙台市における自死事案を受けて，子供たちをこのような悲しいことが二度と起きないように，各学校が改めて自校の取組を見直し，学校全体でいじめ防止に当たることを確認しました。その上で，私たち校長がリーダーシップをより発揮するために，それぞれの学校での取組を共有することで，いじめの未然防止がより一層図られるのではないかという趣旨から調査研究をスタートしました。

調査の初年度ということもあり，内容は網羅的になっていますが，各校の取組や工夫，成果や課題についてなど，記述いただいた事柄は，原文をできるだけ尊重した表現で記載しています。校長先生方の生の声が最も参考になるものと考えています。

今年度は，継続研究の２年目になります。今年度の調査については，９月にアンケートを実施し，現在まとめの作業中です。内容については，年度末に発行される仙台市小学校長会の研究紀要を御覧ください。

⑵　関係機関との連携

①　仙台市青少年対策六機関（教育相談課，適応指導センター，特別支援教育課，児童相談所，発達相談支援センター，子供相談支援センター），小中学校長会生徒指導部会合同研修会

今年度も六機関，小中校長会生徒指導部合計60名ほどが一堂に会して，８月に研修会を開催しました。今年度は「サイバー犯罪の現状と対策について」というテーマで，県警サイバー犯罪対策課より講師をお迎えして研修を深めました。主な内容は，インターネットの基礎知識，SNSの危険性と対策でした。

②　中学校長会生徒指導部との合同研修会

１月に小中学校それぞれの現状・課題の情報交換及び互いの研究発表を行う予定です。今後も，小・中・関係機関の連携を推進していくことが重要であると考えています。

⑶　復興七夕

昨年度は，各校で製作した七夕飾りの回収・製作を，拠点校方式ということで，小学校生徒指導部で担当しました。今年度は，反省を踏まえ，教育センターで担当していただきました。今年度の取組について地区ごとの意見を集約しました。ほとんどは，10年目までは今年度のやり方でいいのではないかという意見でした。七夕製作の意義を児童や教職員にしっかり伝えていき，この活動をより有意義なものにすることが私たち校長の役割であると改めて感じるところです。

３　終わりに

本部会の活動に当たり，関係機関の皆様，会員の皆様の御協力に改めて感謝申し上げます。

新任校長所感

震災から学び，復興に取り組む学校経営

たくさんの方々に日々感謝しながら

鈴木　伸茂（馬場小学校）

本校は全校児童29名の小規模校です。４月当初，子供たちと最初に約束したことは，目指す学校像でもある「笑顔があふれ，楽しい学校にしよう」ということでした。

日々の教育活動の中で清掃，給食，学校行事等は，単独の学年で活動することは非常に難しく，たてわり活動で行うことが非常に多い学校です。その中で，高学年児童は温かいまなざしで低学年児童に支援・援助し，低学年児童は高学年児童にあこがれを持って接し，どの子もとてもいい表情で活動しています。この一つ一つが，私にとっては心動かされる出来事であり，着任から半年経過した現在もこのような場面に出会うことが多々あります。

このことは，諸先輩方が築き上げてきた指導のたまものであり，それを温かく見守り支えてくださった保護者・地域の皆様のおかげと改めて感じ，感謝しながら日々過ごしています。今後も，学校は日々児童に寄り添い，常に課題を明確にして学校経営を行うことを肝に銘じて精進してまいります。

どしゃ降りでも安心な湯元小学校を目指して

菅原　孝代（湯元小学校）

湯元小学校の北側には，山の斜面が間近に迫っています。春にはフクジュソウやホタルブクロの花，秋にはヒガンバナ。そしてそれぞれの花を追いかけるように様々なチョウが舞い飛ぶ美しい斜面です。

湯元小学校の校地が土砂災害特別警戒区域に指定されたのは今年の３月です。校舎北側半分はレッドゾーン，南側もイエローゾーンの警戒区域となりました。これまで地域に土砂災害警報が出されたら避難所となっていた湯元小学校の体育館は，大雨の時，避難所の役割を果たすことができなくなりました。

土砂災害警報が出された時の職員の動き，子供たちの登下校の判断。湯元小学校独自のマニュアル作りに取り組むことが平成29年度の課題でした。土砂災害警報対応の引き渡し訓練も実施しました。

災害時に学校はどう動くか。地域の皆様のために何ができるのか。町内会の皆様や行政の方々との話し合いが続いています。子供たちの安全な学校生活を保障し，地域の皆様の役に立つ学校でありたい。斜面を見上げては気持ちが引き締まる毎日です。

笑顔と元気の源

熊谷　礼子（栗生小学校）

前校長の佐藤朗先生から「子供も，そして先生方も笑顔で笑い合える学校経営」をお願いされました。たすきを渡されてから半年も経つのに，未だに右往左往し，歴代の校長先生方の「貯金」で暮らしているようなものです。名札を付けていても，業者の方に「校長先生はどちらですか？」と聞かれる有様です。本当に困っているのが朝会等での挨拶です。なかなか子供の心に響く話ができません。いつも自己採点は60点。一方で，先生方は，どんな場面でも学年に応じ分かりやすく問い掛け，ここぞというときに上手に子供たちを褒め，100点満点です。それでも，蕃山に見守られ，四季折々の自然豊かな「くりりん」のある小学校での毎日は私にとって宝物です。先生方と子供たちが一緒に笑顔でいられるよう私にできること，それは私自身も笑顔でいることです。地区校長会を始めとする先輩の校長先生方からのアドバ

イスや同期の新任校長先生方からの励ましも私の笑顔と元気の源になっています。

燈々無尽（とうとうむじん）

奥山　浩二（加茂小学校）

新任の頃，今でも忘れられない光景があります。町の教育委員長さんの御自宅に挨拶に行ったとき，新任の教頭先生が道路に伸びていた一本の梅の枝を折りました。立派な木の枝を迷いもなく折るその光景には，驚かされました。次の瞬間，その教頭先生の口から出た言葉は「子供の目に入ると危ないから…」。私は「ああ，そういうことか！」と思いました。

それから,30数年後。私は現任校に着任しました。最初に取り組んだのは木の剪定です。たくさんある校庭の松の木。子供たちの目の高さにある枝を，技師さんに切り払ってもらいました。きっと新任の頃の思い出が頭の中の隅っこにあったからだと思います。

昨年度，教頭会でお世話になった校長先生から，「燈々無尽」という言葉を教えていただきました。「小さな灯が消えることなくつながっていく」,「先輩から学んだものを伝えなさい」ということだと思います。歴代の校長先生が腐心し，築き上げてきた本校の無形の力をしっかりと受け継ぎ伝えていきたいと思います。

「あったかことば・あったかしぐさ」を虹小名物に

伊藤　恵子（虹の丘小学校）

虹の丘小学校は昨年開校30周年を迎えました。開校当時を知る方々から思い出話を伺う度に，地域に愛されてきた学校であることを感じております。

本校の協働型学校評価の重点目標は,「あったかことばを使う子•あったかしぐさができる子を育てる」です。着任した４月は,「あったかしぐさとは？」と思い悩みましたが，教職員と共に考え，子供たちと話し合い，保護者・地域の方々にも協力をお願いし,「あったかことば・あったかしぐさ」を虹小の名物にしようと取り組んでいるところです。賞賛や感謝，励ましなど，相手を思う優しさを素直に表現する子供の育成を通して，いじめのない明るく楽しい学校づくりを目指しています。

校長として，学校・家庭・地域が連携しなければ学校経営が成り立たない現実を日々感じています。その要となるべきは校長であることも自覚しています。強いリーダーシップを取る力量はまだまだありませんが，教職員との信頼関係を大切にしながら，学校経営の知識と技量を磨いてまいります。

児童の可能性を信じて！

横橋　純夫（南光台東小学校）

本校では，教育活動全体を通して，知・徳・体の調和のとれた教育を行い，確かな学力を育成し，豊かな心を育み，体力向上及び健康増進を図るために様々な取組を行っています。その中の特徴的な行事の一つが持久走記録会です。児童が頑張って走る様子を保護者に公開する１年の最後の記録会は12月に実施します。しかし，その日に至るまで，夏場以外の毎週火・金曜日の業間３分間走，そして６月と10月に学年ごとの持久走記録会を実施し，タイムを計測します。同学年児童が一緒に走りますので順位はつきますが，それよりも大事なことは，最終的な記録をどこまで縮められるかであると児童には話しています。「今の自分を超える」「より良い自分を目指す」その気持ちを持たせるためには，教師が児童の可能性を信じて，一人一人に挑戦する機会を与えることが大切だと本校教職員に話しています。

可能性は無限大！自分の限界を決めずに，果敢にチャレンジし，最後まで諦めずに取り組む児童を，教職員一丸となって育てていきたいと思います。

ひまわりのように
夢に向かってまっすぐに

熊谷　裕行（向陽台小学校）

「陽にむかう子らつどう丘　希望の丘よ　向陽台」校歌の歌詞にふさわしく，本校の校章は「ひまわり」です。「子供たちが自分の夢を描き，力強く，まっすぐに育ってほしい。」ひまわりは，校長としての願いそのものとも言えるシンボルでした。向陽台の大地にしっかりと根を張って,大きな葉を広げ,

お日様に向かってまっすぐに伸びていく姿が，本校の目指す子供の姿と重なっています。そのような子供たちを育てるために，どんな学校経営を行っていくのか，毎日が身の引き締まる思いの半年間でした。大規模校であるがゆえに抱える課題も多い中で，地域の諸団体との良好な関係や町内会長さん方からの御支援，屈指の実力を持つひまわり吹奏楽団，笑顔を絶やさない教職員など，学校にとっての宝物もたくさんあります。この強みをしっかりと生かし，地域・保護者の皆様からは，愛情というたっぷりの栄養と，教職員が注ぐ温かい陽の光と水によって，厳しい風雨も乗り越えられるたくましい子供たちを育てていきたいと思っています。

ああ金色（こんじき）の輪よ

多賀野　修久（泉松陵小学校）

本校は松陵小学校と松陵西小学校が統合し，新たに泉松陵小学校として開校５年目となりました。そのため，５年生以下の児童は全て泉松陵小学校への入学ですが，６年生は二つの学校からやってきた最後の学年となります。本校の校章は統合前年度に松陵西小学校の１年生だった児童，つまり現在の６年生児童のデザインによるものであり，松陵地区の丘陵を形取る三角形を，無限に広がる子供たちの輝かしい未来と，手を携えて共に助け合う心の大切さを込めた金色の輪の帯が囲む校章です。

さらに仙台市立荒町小学校長を最後に御勇退なされた曽我道雄先生作曲の校歌には，元仙台市立第二中学校長の佐藤弘先生が「ああ金色の輪よ　羽ばたく力」という歌詞を書いてくださっています。

この校章と校歌に込められた「金色の輪」こそが，本校の学校経営の底流であり，「輝く未来を切り開き，心豊かでたくましく生きる子供を育てる」という私たちの使命に，身を引き締めて学校経営に当たる所存です。

スローガンに思う

加藤　徹（郡山小学校）

「もっとすばらしい郡山小にしよう！もっとすばらしい自分になろう！」

これは，校舎４階の窓に掲示されている本校のスローガンです。４月に初めて目にしたこのスローガンに，強く心を打たれたことを今も鮮明に覚えています。スローガンは，新任校長の私に「次は，あなたがもっとすばらしい郡山小学校をつくりなさい。そして，学校経営を通して，あなた自身が人間として成長しなさい。」と呼び掛けているようでした。

後に，これは先代の校長先生が制定されたものであることが分かりました。苦難の時代もあったと聞く本校の学校経営を，家庭・地域と連携し一丸となって乗り越え，今日の「すばらしい郡山小学校」をつくりあげてきた歴史が，このスローガンに宿っています。

私は，毎朝このスローガンを見上げながら，次の時代を託された私たちの責任の重さとともに，今以上に「もっとすばらしい郡山小学校」にしていくための決意を新たにしています。

編集後記

この度，会員の皆様の御協力により，『廣瀬川』第93号を刊行することができました。

今年度仙台市校長会では，活動の重点の中に「命と心を守り育む教育」を重点事項に掲げています。そこで，本号座談会では，「復興と心の教育」と題し，仙台市教育委員会学校教育部佐藤参事はじめ，被災地支援にいかれた養護教諭の先生，そして閉校・統合を経た被災校の校長先生方に御出席いただき，それぞれの立場から子供たちの心を育む取組について対談していただきました。また，小学校での今後の情報活用の授業の在り方や各専門部・各地区の提言，そして新任の校長先生方から寄せられた思いも掲載いたしました。今後の学校経営の一助になれば幸いです。

発刊に当たり，御多用の中，快く玉稿をお寄せいただいた校長先生方に厚く御礼申し上げますとともに，会員の皆様のますますの御活躍を祈念いたします。

（93号担当チーフ　三浦　記）

編集担当者：三浦敏光（福岡小）　菊地禎広（人来田小）　高橋文子（上愛子小）　佐藤潤一（遠見塚小）